

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」にみる 研究者の生き方

どうしてジョバンニは主人公なのか？

水野 皓司

宮沢賢治は、不思議な人である。不思議な童話作家で、不思議な詩人である。童話「オツベルと象」では、象は「グララアガア、グララアガア」と鳴き、「風の又三郎」では、風は「どっどどどどどど どどどど どどどど」と吹く。

宮沢賢治は、シャーマンであるという説がある。シャーマンとは、人々に行くべき方向、道を示す人である。詩集『春と修羅』では、自分は“有機交流電燈”でみんなと一緒にせわしく明滅している、と言い、この世の因果関係について説く。

賢治の最後の童話「銀河鉄道の夜」は、主人公のジョバンニが「みんなの幸い」を探す修行の旅に出かける、その様子を描いていると考えられている。一方、我々研究者というか科学を生業としている者からみると、この童話は、あたかも研究者としての生き方を示しているように思われる。

「銀河鉄道の夜」は、賢治の晩年ほぼ7年間にわたって書かれたもので、第1次稿から第4次稿まで推敲が重ねられたが、それでも未完成であるといわれている。ここでは、最終稿である第4次稿を基に考えていきたいと思う。

物語は、小学校の「午後の授業」の様子から始まる。そこで、この童話の主人公ジョバンニは、先生にはある程度認められてはいるらしいものの、引込み思案の、いじめられっ子らしい少年として登場する。銀河のお祭りの日の夕刻、病弱の母親のために牧

場に牛乳を取りに行く。空にはしらじらとした天の川が流れ、その空の下、街灯に照らされた自分の影ぼうしがまるで機関車のように思いながら、牧場の丘に着く。冷たい草に体を投げ出し、遠くに汽車の1列に並んだ窓を見ているうちに、ジョバンニはいつのまにか銀河鉄道の車室から外を眺めている自分に気が付く。向かいの席には、同級生のカムパネルラがいる。

列車は最初の「銀河ステーション」を出発して、次の「白鳥の停車場」にかっさり11時に着く。20分の停車時間の間にジョバンニとカムパネルラは、近くの「プリオシン海岸」に行ってみる。そこでは、5、6人の人たちが120万年前の貝とか獣の骨を掘っていて、ジョバンニが「標本にするんですか」と尋ねると、学者らしい人が答える、「いや、証明するのに要るんだ。(中略)ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか。」

この学者はただ単に標本にするのではなく、次の段階への展開を目指して、「実験によって証明すること」を教えている。我々の研究においても、実験によって証明された、つまり客観性また普遍性をもったものが論文として発表され、知識として蓄積され、それを基に研究はさらに次の段階へと進む。次々にどこまでも、どこまでも。そしてこの「どこまでも」は、実は次に述べるように、童話「銀河鉄道の夜」のメインテーマになっている。

「銀河鉄道の夜」の主人公は、ジョバンニである。彼はなぜ主人公なのだろう。

う。この物語は、「みんなの幸い」を探すためのつらい修行の旅に関するものである。その主人公に、なぜジョバンニは選ばれたのだろうか。銀河鉄道には、カムパネルラのほうが先に乗っていたように見える。カムパネルラはジョバンニに教える。「(ほかの)みんなはねずみぶん走ったけれども(この列車に)遅れてしまったよ」と。また次の駅が「白鳥の停車場」であることを、ジョバンニより先に知っていた。それなのに、主人公はなぜジョバンニなのだろうか？

ジョバンニはなぜ選ばれたのだろうか？

「白鳥の停車場」では、新しい乗客が何人か乗ってくる。その中の1人がジョバンニに「どちらへいらっしゃるんですか」と聞き、ジョバンニは「どこまでも行くんです」と答える。「すると、向ふの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらっとこっちを見てわらひ」、自分は鳥捕りであると自己紹介をする。そして鳥を捕るやり方などを話してきかせるのだが、この鳥捕りは、列車の窓から見える天の川の河原に空間を瞬間移動して鷺を捕り、またそこから瞬間移動で列車に帰ってきたりして、ジョバンニを驚かす。おかしい気がしたジョバンニは、「どうしてあそこから、いっぺんにこゝへ来たんですか」と問う。すると、その鳥捕りは「どうしてって、来ようとしたから来たんです」と答える。そのとき、車掌が車内改札にやってくる。ジョバンニは、自分は切符を持っていたらどうかと「すっかりあわててしまって」、でももしかしてと思いながら上着のポケットに手を入れてみると「はがきぐらみの大きさの緑い

ろの紙」が見つかる。「車掌が手を出してあるものですから、何でも構はない、やっちなへと思って」渡すと、それを見て車掌は「よろしうございます」と了承して向こうへ行ってしまう。すると、鳥捕りが「横からちらっとそれを見てあわてたやうに」言う、「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。(中略) どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、(中略) どこまでも行ける筈でさあ」と言って、その後もその鳥捕りはときどき大したもんだというようにちらちらジョバンニを見ている。そんな様子を見ていたジョバンニは、なんだかわけもわからずに鳥捕りが気の毒でたまらなくなり、「この人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙ってゐられなく」なる。ところがそのときは、もうその鳥捕りはいなくなっていて、辺りにはリンゴと野茨の匂いが残っている。鳥捕りはその後、一切登場しない。この展開は、なんとも不思議な光景である。この童話の中で、この光景はなぜ必要なのだろう？

ジョバンニは、その後「みんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。どこまでもどこまでも」。なぜなら、どこまでも行くための切符を持っているのだから。ジョバンニが持っている切符がそういう目的のためであることを教えたのは、あるいは指示したのは、あの鳥捕りである。それも、ジョバンニが「どこまでも行くんです」と自分の意志を答えた後のことである。鳥捕りは、空間を瞬間移動したり不思議な能力を持っている。また彼は、大きな鍵を持っている。鍵は普通、全体を仕切る人が持っているものだ。この鳥捕りは、実はみんなの幸を探しにどこまでも行く人を見つけるという大きな使命をもって列車に

乗り組んだ、いわば天からの使者ではなかったのか？ そうして、ジョバンニの「どこまでも行くんです」という答えから、ジョバンニがその使命にかなり能力・意思をもっていることを見つけたのだ。それが、この童話でジョバンニが主人公に選ばれている理由ではないのだろうか。白鳥の停車場で乗り組んだ使者の鳥捕りはジョバンニという適任者を見つけ、ジョバンニ本人には気付かれないうちに上着のポケットに緑色の切符を入れ、そして役目を終えた使者は速やかに去ったのだ。

科学の研究は、あることが理解されるとその研究の境界が広がり、その先に次の未知が広がる。つまり、どこまでも研究の対象がなくなることはない。研究を行っている者にとって、どこまでもやってやろうという心構えが重要である。1つの成果として論文を発表することは、それでその研究が終わったということではなく、それを基にまた次の展開、成果を期待しているためでもある。また、それまではその成果と一見関係がないような分野と一緒にあって、さらに次の段階が開けてくることも、我々によく経験する。この童話「銀河鉄道の夜」は、我々に改めて研究というものは、どこまでもやっていくという覚悟が必要であることを教えている。

この童話には、「みんなの幸い」、つまり研究者の立場に置き換えると「真理」になるのであろうが、真理を探しにいくとき必要なもう1つの心構えが示されている。それは、「鷺の停車場」でリンゴの香りと一緒に乗ってきた女の子の話にある。その子のお父さんが話してくれたという蠍の話である。むかし1匹の蠍が小さな虫などを殺して生きていたが、ある日イタチに見つかって食べられそうになる。蠍は「一生けん命遁げて遁げたけど」、イタチに押さえられそうになったとき、井戸に落ちておぼ

れ始めた。

そのとき、蠍は次のように言ってお祈りしたという。「わたしはいままでいくつも命をとったかわからない、(中略) どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったらう。そしてわたちも1日生きのびたらうに。どうか神さま。(中略) この次にはまことみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい」と。そのとき、蠍は天で輝き続ける赤い火になって夜の闇を照らしている自分を見る。

また、同様のことはこの童話のおしまいのほうで、カンパネラが川でおぼれた友人を助けるために我が身を捨てるということにも示唆されている。さらに、賢治の没後見つかったメモ、実は彼の病床での祈りといわれる「雨ニモマケズ」の中にあるフレーズ「アラユルコトヲジブンヲカンジョウニイレズ」に明示されている。

研究者が論文を発表するということは、仏教でいう捨身と考えることができ、それは自分の論文を基にさらにどこまでも研究の発展が継続されることを期待してのことである。論文の評価として「Science Citation Index (被引用回数)」が用いられるゆえんである。

[文中の引用は、鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』(岩波現代文庫、2001)による]

Profile



水野 皓司

(みずの こうじ)

1968年東北大学大学院博士課程修了、工学博士。東北大学助手、助教授を経て、84年同大学教授(電気通信研究所)。04年同大学名誉教授。客員教授。90~98年独立行政法人理化学研究所チームリーダーを兼務。この間、ミリ波、

テラヘルツ波帯デバイス、計測装置の研究開発に従事。03年文部科学大臣賞(研究功績者)、10年応用物理学会功労会員。趣味:フルート演奏、ヨット・セーリング。

koji@riec.tohoku.ac.jp